

# もっと知りたい

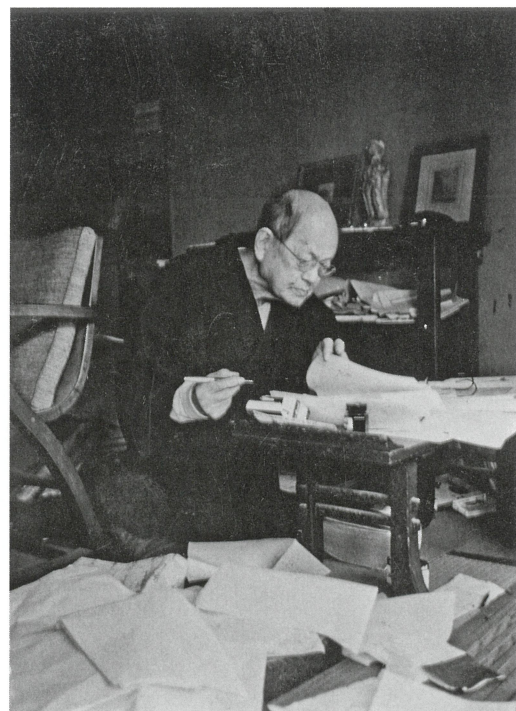
## 武者小路実篤

# げんこうと 原稿を読み解く

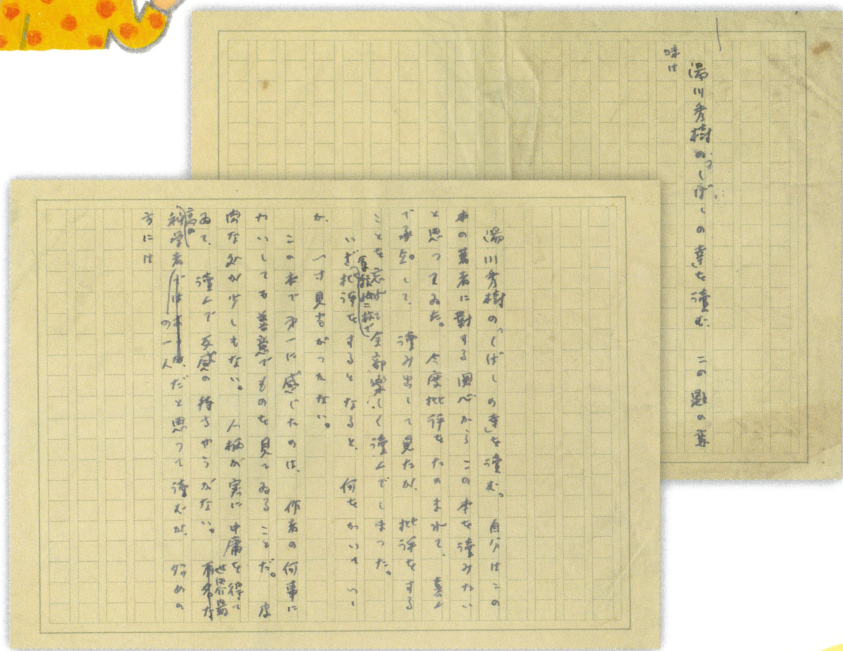
## 【実篤の書き方】



なんだこれー。  
途中までしか書いていない原稿だ。



調布・仙川の家で原稿を書く実篤 75-80歳頃



書きたいと思った気持ちに、  
ぴったりの言葉がすらすら出て  
くるまで、何枚も書き損ないを  
出してしまったのだよ。

書き損ないで散らかったままに  
なっている中で仕事をする方が  
落ち着くんた。



原稿をかく喜び

武者小路実篤

久しぶりに

原稿をかくことが

たのしみになった

かげばかく程

かきたくなりそうだ。

何かうんと大きなものよ

生れ出てこい。

『重光』第3巻第19号(昭和9年)より

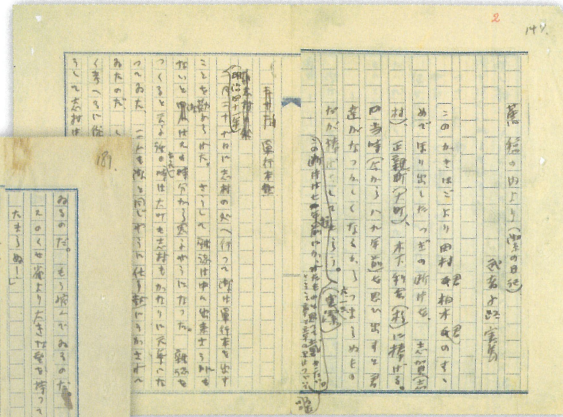




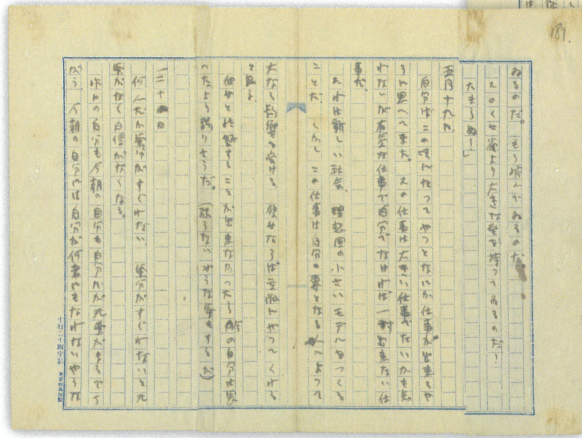
僕は原稿をあまり直さないと  
みんなから言われることが多いんだ。  
でも、直したくなった作品もあるんだよ。

昔の文章を切り貼りした

「旧稿の内より（潔の日記）」



元の紙を切って貼ったんだけど、よく見ると、ちょっとずれちゃってるなあ。



武者小路実篤 大正5(1916)年6月13日再編集

潔ってというのは、実は僕のことなんだ。  
22-24歳頃に書いた文章を30歳の時に読み返して、  
作品にできるよう組み立て直した原稿だよ。

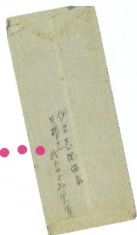
発売された雑誌に変更を  
直接書き込んだ

あかつき  
「暁」

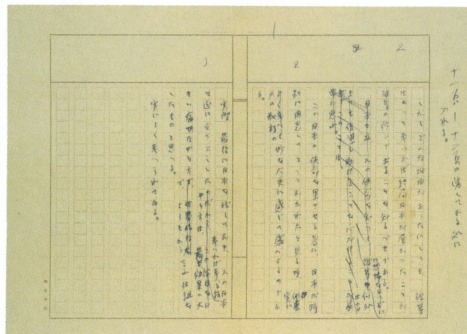
雑誌に載せる回数が決まっていて、  
最後の場面を丁寧に書けなかったんだ。  
だから単行本にする時、原稿を  
12枚削って30枚足したんだよ。

編集者に送った  
差し替え原稿

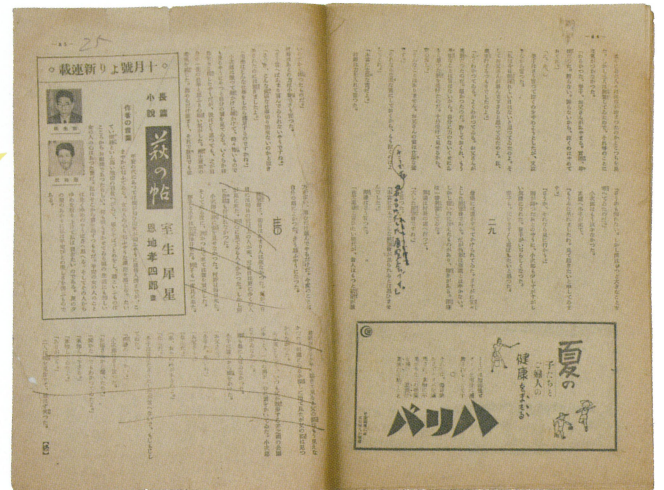
「大東亜戦争私感」



ふうとう  
封筒



武者小路実篤 昭和17(1942)年発表



『婦人朝日』第19巻第9号 朝日新聞社 昭和17(1942)年

実篤の試行錯誤の跡が  
原稿には残っているんだ!